



前思春期ヒステリー症例の心理治療過程と家族画の変化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 信介 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/1121

前思春期ヒステリー症例の心理治療過程と 家族画の変化

清水 信介

Psychotherapeutic Process of a Preadolescent Hysterical Case and the Change of Kinetic Family Drawings

Nobusuke Shimizu

Abstract

In this paper, the author reports on the psychotherapeutic process of a preadolescent girl with hysterical symptoms who was ten years old. She was suffering from hysterical symptom of inhaling air strongly at intervals of two or three seconds incessantly. Also she had difficulty in ascending stairs or slope. Nonverbal psychotherapeutic approach was applied to her once a week for eight months in conjunction with mother counseling. And she showed an essential advance.

I はじめに

心理療法における非言語的技法の利用は近年ますます広まりつつあり、種々の技法が開発されている。殊に、自己の内的体験を言葉によって表現することを十分になし得ない児童や思春期のケースの治療においては、遊戯療法、箱庭療法、描画療法などの非言語的接近が大きな力を発揮する。また、精神病圏の症例に対する心理療法(精神療法)的接近においても、注意深い考慮の下に非言語的技法が適用されるならば、それらが有効な治療戦略となることが知られている。

筆者は、最近、児童期、思春期のクライアントと接する機会が増え非言語的接近法を用いることが多くなったが、青年や成人のケースでも言語的交流が困

難な、あるいは言語的表現を苦手とするクライアントなどに対して箱庭、描画、粘土造形などによるイメージ表現を中心とする方法を試みている。それらの経験の一部については、以前に口頭発表の形であるが報告している。⁷⁾⁸⁾

ここに報告するのは、ヒステリー症状を呈する前思春期の少女に行った非言語的技法を主体とする心理療法の記録である。本事例では、箱庭、自由画、相互スクリブル、粘土造形、動的家族画などを治療の流れに応じて適宜用い多面的な方法でクライアントのイメージ表現を促進するという接近がなされている。これは山中(1979)⁹⁾¹⁰⁾が提唱する多次元表現療法の考えに負うたものである。以下では、29回にわたる治療面接の経過を報告し、症状形成の背後にある家族力動、治療関係、治療過程におけるイメージの変遷などについて考察する。

Ⅱ 事例概要

【クライアント】 M子 10歳 小学5年生

【主訴】 2.3秒間隔で休みなく息を強く吸い込む症状。また、階段や坂を上るのに困難がある。

【家族構成】 父親39歳、母親36歳、弟8歳(小3)と本人の4人家族。3年前に父親が地方へ単身赴任し、以来週に一度家族の下へ帰る生活を続けている。父親は温和で生真面目な性格で、職場ではおとなしいがよく働く人という評価を受けている。父親は、子供の頃自分の父親が職業柄(検事)忙しく接触が少なかったためもあって、子煩悩で子供とはよく遊ぶが、子供を叱ることはあまりない。時に「ママ、叱って」とその役割を母親に求めるところもあり、その分母親が怒るということにもなっているという。母親の言によると、M子も弟も父親に対しては怖さがないという。母親は女性的な柔らかさに欠けたギスギスした感じの人である。神経質、心配性であるが、勝気で感情の激しい面も持っている。弟は、身体が大きいが内向的でおとなしい男の子である。

【生育歴、現症歴】 満期出産。陣痛開始から出産までに4日位かかり、仮死状態で生まれた。2日間哺育器の中に置かれたが、その後は母乳で育ち特記

すべき問題はなかった。M子が1歳6ヵ月の時に弟が生まれた。弟の誕生後は、父親がM子を母親は弟をというように分担する形になっていった。母親は「お姉ちゃんなんだから」とM子の躰に厳しく、排泄訓練などで失敗すると叩いたりしたので、M子はいつもびくびくしていたという。また、母親は何かにつけ弟の方をたてて育ててきた。

M子は常におとなしく活発さのない子であった。保育所でも自分から友達をつくっていくことが出来ず、保母にも寄っていくことがなかった。弟とのことで嫉妬することはあったが、親に逆らうことはなかった。

小学2年生になる時、父親が地方へ転勤。家族全員で移ったが、病身で独り暮らしの父方祖母の世話、M子が転校先でいじめられ登校を嫌がったこと、母親が田舎の生活に耐えられなかったことなどの事情から、その年の夏休みには母子3人だけM市へ戻ることになった。3年生になる頃から、M子は母親に「Qちゃん(弟)ばかり可愛いんでしょう」と言い、弟に当たったりするようになる。学校の作文にも「母さんは弟だけが可愛い……」と書いたりしていた。

4年生になると、M子の家庭が大きく揺れる出来事が2つ続いた。父親の職場で直属の上司が横領事件を起こし、父親自身は事件に関与していなかったが、事件発覚に関連して彼の生真面目さが上層部の不興を買い左遷されることになった。父親は一時転職を思って1ヵ月程職場に出ず自宅にいたが、同僚に「ここで辞めたら貴方の負けになる」と説得され配転先に移った。さらに、8月下旬に父方祖母が他界し、その直後から遺産相続をめぐる父親の姉妹との間でもめ、翌年1月頃まで半年位にわたって激しいやりとりが繰り返された。父親の姉は言いたい放題に言い、それに対して勝気な母親はM子らの前で派手に応酬することが何度かあったという。

4年生も終りの2月上旬のある夕方、M子は自宅で過呼吸発作を起こす。以後いくつかの病院を受診したが、過呼吸症候群は最初の1週間位だけで、その後は前述の症状に固定する。3月上旬にM病院小児科に入院。しかし、症状に変化なく、3月末主治医から心理療法の依頼があり、筆者の下へ来談することになった。

〔治療期間〕 5年生の4月上旬から12月上旬までの8ヵ月間、29回の面接を行った。これと併行して、やはり筆者が14回の母親面接を行った。

Ⅲ 治療過程

ここでは、M子との面接を中心に、治療過程を4期に分けて報告する。

第1期 (第1回面接～第5回面接)

これは導入段階からM子の葛藤・問題が表現されるまでの時期である。主治医からの依頼があった数日後に母親のみ来談し、現病歴、生育歴などを聴取した。母親は痩せ型で目の大きな女性で、はきはきと喋るが、神経質で緊張の強い感じの人であった。

〔第1回面接〕 (4月7日)

母親と2人で来談(以後第11回まで同じ)。階下から「ハアーッ、ハアーッ」と喘ぐような声が聞こえ始めたが、面接室がある2階までなかなか上がって来ないので私が迎えに出てみると、M子は2階まであと2段位のところにいた。私が手を貸して面接室へ入る。M子はひっきりなしに「ハアーッ」と強く息を吸い込む。私も切なくなるほどである。症状が始まった頃のことなどを少し聞く。彼女は問いかけに対してはきちんと答えるが、自発的に発言することはなく、私と視線を合わせることもあまりなかった。〈自由画〉に誘うと、画用紙の左半分領域

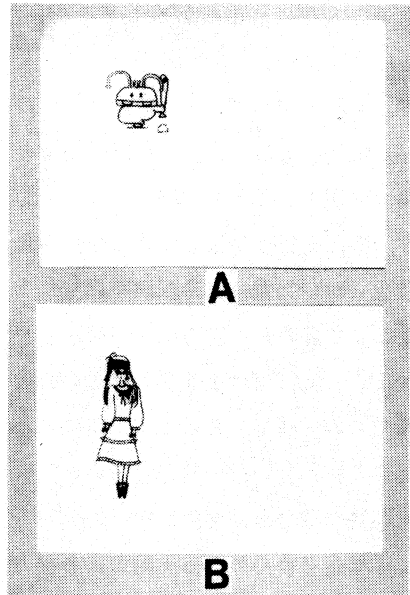


図-1 バイキン君/可愛い人

だけに鉛筆画で小さく「左バッテリーボックスに構えるバイキン君」を描く(図-1 A)。描画から彼女の内向的で引込み思案なあり方が窺われたが、こちら

に向かってバットを構えるバイキン君を見て私は彼女と交流することへの手応えを感じた。この後、M子が砂箱の方を見ているので<箱庭>に誘ってみると、ためらいなくとりかかる。数分で作り、《遊び場》と説明する(図-2)。中央に丸テーブルと2つの椅子。周辺に滑り台、ブランコ、シーソー、家、木などが置かれている。人間も動物もない静的で寂しい感じの作品である。

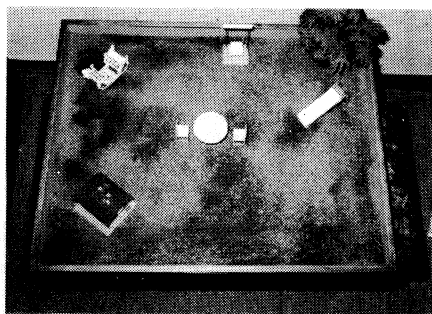


図-2 遊び場

面接の終盤20分ほどは<交互色彩分割法>⁶⁾を試みる。言語的な交流を性急に求めることは控えて、非言語的な次元で2人が交流する経験を持てればと考えてのことである。彼女は比較的自由に空間分割の線を引き、彩色の際に金色、銀色や暖色系の色も用いていた。

〔第2回面接〕 (4月14日)

箱庭に誘うが、M子は微笑して首を横に振る。粘土をやるとうことになる。お互いに粘土をこねながら、好きな学科、嫌いな学科のことや、前日ペットショップで手のり文鳥を買って貰ったことなどについて話し合う。<相互粘土>では、M子が「白鳥」、私は「白兎」を作った。

母親の話では、4月8日にM病院を退院し、医師に登校をすすめられたが、身体のだるさがありまだ行かせていない。M子自身は、体育の時間だと級友が運動しているので息を吸う音が目立たないから、体育の時間だけ行きたいと言っているという。

〔第3回面接〕 (4月21日)

階段を上がって来る時から息の吸い方がこれまでより幾分軽くなっている感じを受ける。今週は登校して2時間位つとめて帰って来た。

<自由画>では、やはり用紙の左半分の領域に鉛筆画でM子と同年の「可愛

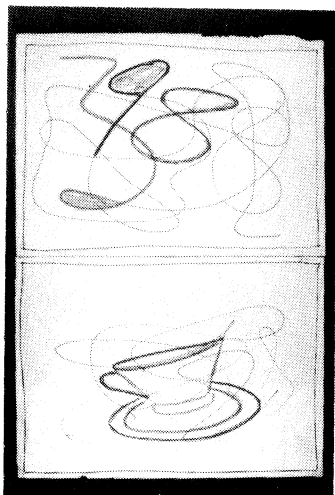


図-3 る・9・8 / ティーカップ

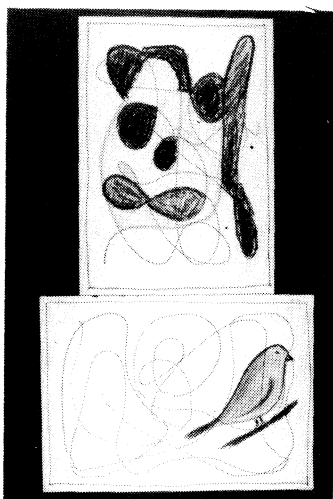


図-4 怒鳴っている女の人 / 鶯

い人」を描く(図-1B)。この回、＜相互スクリブル＞を導入し、枠あり(以下、枠⊕と表示)で2回試みる。その手続は、まず私が用紙に枠づけし、なぐり描きをする。そして、描線へのイメージの投影の仕方を例示する。その後、彼女が私の枠づけした紙になぐり描きし、私も彼女が枠づけした紙になぐり描きをする。それらを交換して互いにイメージを投影し、彩色して仕上げるのである。

1回目のスクリブルでは、M子は「る・9・8」の文字を投影。それは描線をなぞっただけのようなもので、彼女の自由さの少ないあり方を反映しているように思われた。私の方は、彼女の受け皿になろうという気持で「ティーカップ」を投影した(図-3)。すると、2回目は、彼女が「怒鳴っている女の人」を表現する。私は「鶯」であった(図-4)。怒鳴っている女性は彼女の母親イメージではないかと考えた。

〔第4回面接〕 (4月28日)

今週は全部の授業に出ているという。＜箱庭＞を作り、《動物がいる》と説明する(図-5)。中央に丸テーブルとロッキングチェアが置かれ、下辺中央に一軒の家がある。駝鳥、チンパンジー、犬、鶏が登場す

る。＜スクリブル＞(枠⊕, 2回)では、1回目、M子は「喧嘩して大声で話してい

る35歳位の女の子の人」，私が「白鳥」であった。その女性はM子の母親の顔によく似ていた。喧嘩して大声で話しているということから，私は母親と伯母の口論のことを連想する。2回目は，彼女が「学校でお話している12歳位の少女」，私は「寝呆け顔で歩いている犬」を投影した(図-6)。

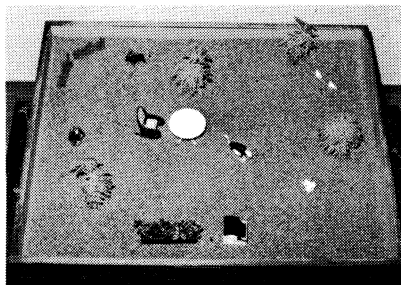


図-5 動物がいる

母親の報告では，M子は来談を楽しみにしており，症状も軽くなってきたという。

〔第5回面接〕 (5月4日)

<箱庭>は「庭の広い家」。砂箱全体が右上隅にある家の庭という構成である。中央に丸テーブルと2つの椅子。左下にブランコ，シーソーが置かれ，白い犬が1匹いる。初回に左下隅にあった家が今回は最も現実的な領域である右上隅に移っているのが注目された。

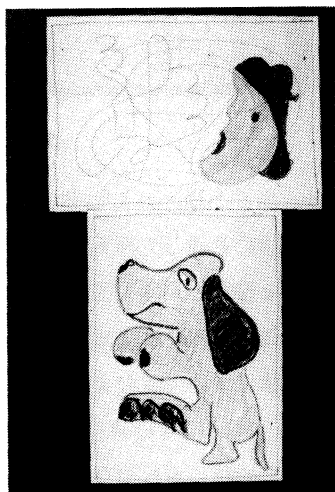
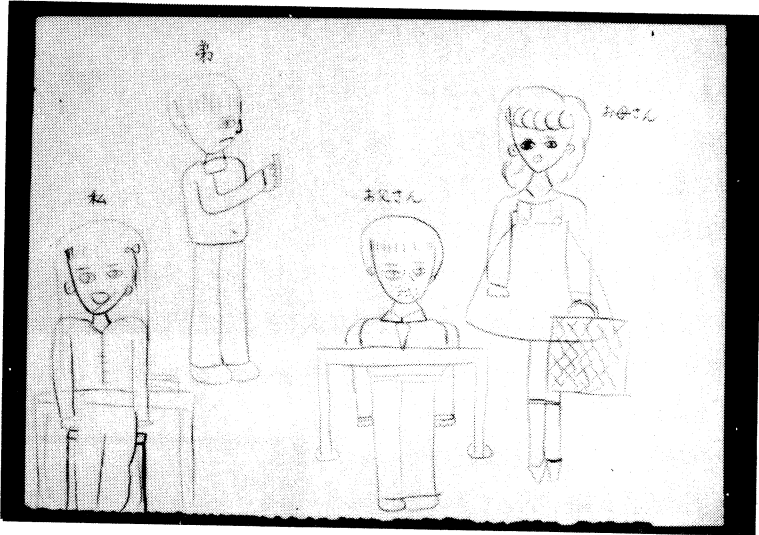


図-6 お話している12才位の少女／寝呆け顔で歩いている犬

<スクリブル>(枠⊕, 2回)では，1回目M子は「のろまな子鼠」，私は「パンダ」。2回目は，彼女が「朝起きてあくびしている小学4年の女の子」を投影し，私は「天狗」であった。

この回，<動的家族画>²⁾を導入すると，弟，父親，母親，自分の順で描く(図-7)。彼女の説明によると，「弟は教室で問題を当てられて困った顔をしている。お父さんは会社で名前呼ばれて緊張して立っている。お母さんはお使いに行くところ。私は学校でお喋りしている」のだという。その家族画は多くの興味深い特徴を含んでいたが，中でも家族内での父親とM子の位置が低い



図一七 動的家族画(1)

こと、黒々と描かれた母親の眼、それとは対照的に父親とM子の瞳がないこと、父娘に共通して押えつけるかのように机が描かれていること、M子の左口元に走る線などが印象的であった。絵はM子が認知している家族状況や症状形成の背後にある葛藤を雄弁に語っているように思われた。この時点で、私は彼女の症状について次のような仮説を立てた。すなわち、息を強く吸い込む症状は、第一義的には母親に向かおうとする攻撃性を呑み込もうとするものであり、また同時に退行的な様式で甘え願望を満そうとするものでもあるいはないかと考えた。

第2期 (第6回面接～第14回面接)

この時期に入ると、治療の退行が徐々に起こり、M子は少しずつ母親に甘えを表現するようになり、さらに父母に対して攻撃性を向け反抗するようになっていく。

〔第6回面接〕 (5月12日)

<箱庭>を作り、《動物がいて、遊ぶものがあるって楽しそう》と説明する(図一八)。駱駝が登場し、これまでの動物よりも少し大きなものになってい

る。

<スクリブル>(枠⊕)でM子は「笑っている5歳位の女兒」を投影し、私は「ミッキーマウス」であった(図-9)。人物像の年齢が低下し、退行の兆しが窺える。

母親面接での報告によると、M子は母と2人で面接に来ることを喜んでおり、弟がついて来るのを好まない。来談の道すがら母親がM子と手をつなごうとすると、彼女は照れるが喜ぶという。この頃、彼女は母親が買物に行くのにもついて行きたがったり、夜弟が寝た後も母親と起きていて一緒に何かをしたい素振りをみせるようになる。

〔第7回面接〕 (5月19日)

<箱庭>は、<教会。退屈したら遊べるようになっている>と説明する(図-10)。右上隅にアーチ型の門、左下寄りに教会。庭にはシーソーなどの遊具がある。前回の箱庭において左側領域にあった滑り台、丸テーブル、ロッキングチェアが右側へ反転している点が注目された。

<自由画>では、「起きたばかりの雌兎」を描く(図-11A)。やはり左半分領域に描かれているが、今回はピンク、赤、黄色のクレヨンで描かれている。

この後、<スクリブル>を枠ありで2回行う。1回目、M子は「仔犬」、私

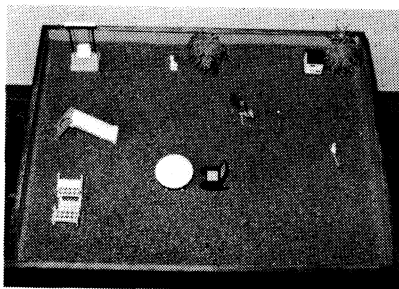


図-8 動物、遊具

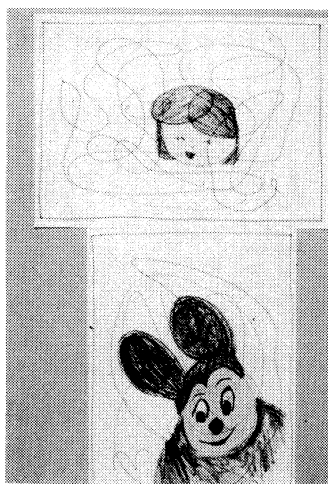


図-9 5才の女兒/ミッキーマウス

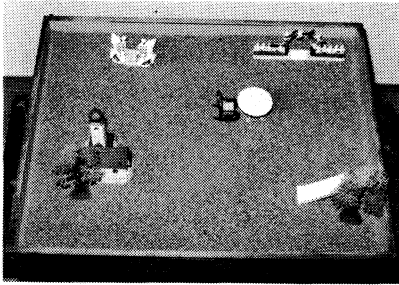


図-10 教会

にいます、ケラケラ笑い、「私の犬も鼠みたい」と言って笑う。

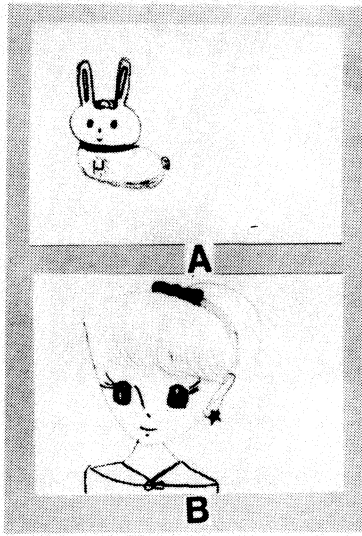


図-11 起きたばかりの雌兔/
可愛い優しい人

になった。気づかずして階段を上れていて、友達にそのことを指摘され自分でもびっくりしたと語る。

<自由画>は「18歳位の可愛い優しい人」(図-11B)。赤、黄、橙、黒色な

は少女漫画の主人公「キャンディ」。2回目は、彼女が「飴の容器(袋)になった人形」、私は「話をしてるペンギンと鳩」を投影した。スクリブルの際、M子は打ちとけた態度を示す。少女キャンディの眼の表現に苦心する私に、M子は少女漫画風の眼の描き方を教えてくれる。私がうまく描けず

面接の終り近くに、私が「M子ちゃんの方で何か聞きたいこととか話したいことはないかな」と水を向けると、初めて彼女の方から通学仲間N子とのもめごとについて語る。N子は独占的な子で、以前からM子に自分以外の人間と一緒に帰るなど言っていた。ところが、一週間位前にM子は級友のU子と一緒に帰ってしまった。N子はU子と仲良くしたことを怒り、千回謝らないと許さないとと言って責めたてるという。

〔第8回面接〕 (5月28日)

これまで階段を上るのが大変だったが、一昨日辺りから普通に上れるよう

どのクレヨンを用いて初めて画用紙のほぼ中央に人物を描く。

<箱庭>では「商店街、住宅地と公園」を作る。これまでの作品では家や教会の庭という構成であったが、今回初めて町並みとなり空間的広がりが出て来る。

母親はN子が執拗にM子を非難してくることを心配して、どうしたものかと治療者に電話してくる。しかし、今回M子の話を知ると、「私ばかり悪くないし、Nちゃんが勝手に怒っているんだから謝らない。Nちゃん、私謝らないよ。」と返事を書く」と自分の気持ちをしっかりと述べる。治療者は彼女の意向を尊重し、もうしばらく見守ることにしようと母親にも伝える。

〔第9回面接〕（6月2日）

階段を駆け上がって来る。3日前から息を吸い込む症状が失くなったという。終始笑顔である。N子に対しても「1回謝って許してくれるなら謝ってもいいけど、私はNちゃん以外の人とも帰るよ」と自分の気持をはっきり伝えた由。<箱庭>は「牛を飼っている家と馬を飼っている家」で、初めて人間(男性)が2人登場し、養い育てるという母性性を象徴するテーマが示される。

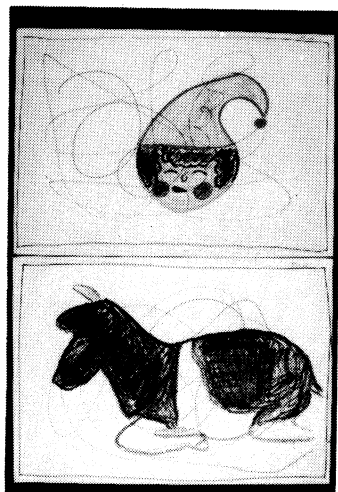


図-12 元気者の小人 / 牡牛

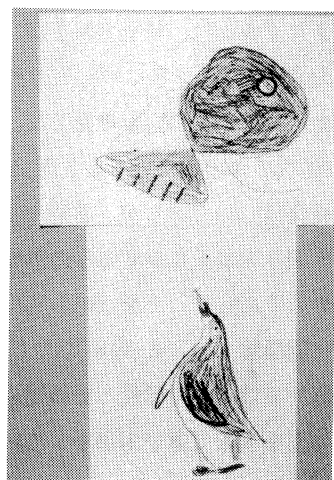


図-13 鯛焼き / 餌を食べるペンギン

<スクリブル>では、枠⊕(内面志向的)⁵⁾で、M子が「笑っている元気者の小人」、私は「牡牛」であった(図-12)。枠なし(枠⊖)で試みると、彼女は「鯛焼き」で、私が「餌を食べているペンギン」であった(図-13)。小人は彼女の内界に生じてきた新しい動きを示すものであろうか。他方、外面的、外界志向的(枠⊖)⁵⁾には口愛的テーマ、甘え欲求の表現がみられ、私もそれに応えるようなイメージ表現をしている。

母親は、M子が1週間位前から朝早く独りで起きてマラソンを始めたこと、彼女が最近自分の意見をはっきり言うようになってきたことなどを報告する。また、症状がなくなったので工大へ行けなくなるのではないかとM子が心配しているという。治療者はもう少し通った方がよい旨伝える。

〔第10回面接〕 (6月9日)

<箱庭>では「田舎の駅」を作る(図-14)。右上隅の駅では人が汽車に乗ろうとしている。汽車はこれから駅を出発して左上隅にあるトンネルの中に入っていく。箱庭作品から、今後さらに治療的退行が進展し、無意識の深みへの下降、内面の探求がなされることが予想された。

<スクリブル>は、枠⊕でM子が「怒っているお爺さん鼠」、私はゆっくり進んでいこうとの気持から「亀」を投影した。枠⊖では、彼女は「海の底にいる魚2匹」を表現する。私は「牡羊」であるが、前回の牡牛と共にこの辺りのM子に対する私の態度が父親的なものであったことを反映している。

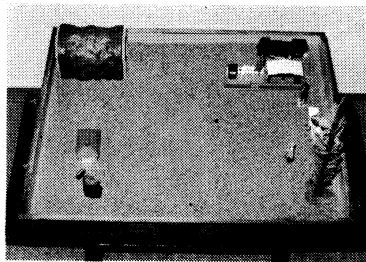


図-14 田舎の駅

〔第11回面接〕 (6月16日)

<箱庭>では「私の学校とその周辺」という作品を作る。校庭では人が1人バケツに土を入れて運び工事をしている。彼女の内面で工事が始まったようである。

<スクリブル>は、枠⊕でM子が「台の上でボールを操るイルカ」、私は「修

道尼」(図-15)。枠⊖では、彼女が「素敵な水鳥」で、私は治療のステップを一段上がる感じを持っていたので「小さい滝を上る魚」を投影した(図-15)。

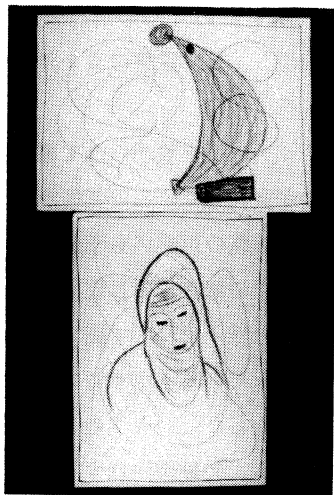


図-15 ボールを操るイルカ / 修道尼



図-16 素敵な水鳥 / 滝を上る魚

〔第12回面接〕 (6月23日)

休暇で帰宅中の父親と2人で来談。〈箱庭〉で「5歳の女の子の部屋」を作る。部屋にはピアノ、机、ベッドがあり、テーブルの側に女の子が一人坐わっている。

久しぶりに試みた〈粘土〉では、彼女は人間と兎のご飯だと言って「目玉焼きと人参」を作る。私は「植木鉢に双葉の芽を出した植物」を作った。

〔第13回面接〕 (7月7日)

母親と来談。〈箱庭〉は「小人の家に遊びに来た子供たち」(図-17)。M子の説明によると、≪5人の小人の家に子供たちが遊びに来て、小人が吹く笛に合わせて踊ったり遊んだりしている。ベッドには赤ん坊が寝ている≫とのことである。今回の作品では初めてブランコ、シーソー、滑り台に人が乗っている。

<スクリブル> (粹⊕, 2回)では, 1回目M子は「3歳位の外人の女の子」, 私は「歌っている河馬の坊や」であった(図-18)。2回目は, 彼女が「ジュース」を, 私は「体操している男子中学生」を投影した(図-19)。前回, 今回と

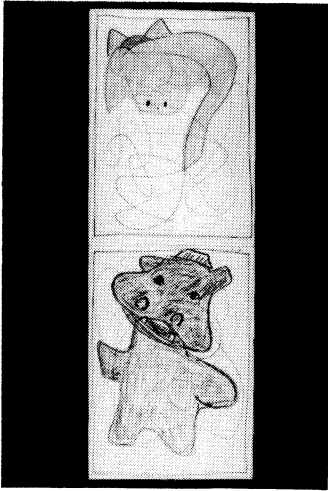


図-18 3才位の女の子 / 河馬の坊や

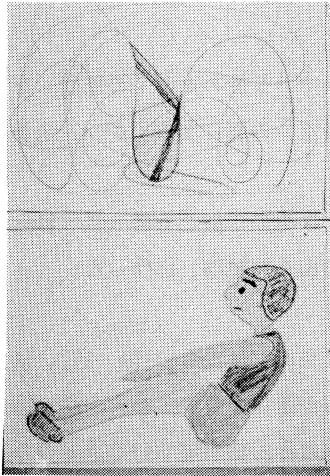


図-19 ジュース /
体操している男子中学生

イメージ表現において年令退行と口愛的テーマが出現し, 甘え欲求の高まりが窺える。

そうしたイメージ表現からみて家庭でのM子の行動が変化している可能性が考えられ, それによる親の戸惑いも予想されたので, 第13回面接の数日後の母親面接において家でのM子の様子について聞いてみる。すると, きょうだい喧嘩がすごいという。ちょっとぶつかったという位のことでも弟を叩いたりする。父母が注意すると反抗してくる。母親の言うことがすぐに癪にさわるという感じである。他面, 母親が買物に出ようとするときすぐついて来て, 置いて行くとすぐふくれるという。母親は強まってくるM子の甘えと反抗に戸惑いを強く示す。そこで, この辺りから第20回面接頃までは親面接の頻度を週1回に増やし, 父母の受けとめがスムーズに行くようにサポートすることに努めた。

〔第14回面接〕 (7月14日)

母親と2人で来談。<箱庭>は「木の根元に横たわる5人の子供」(図-20)。最初に砂箱の中央にポプラの木を1本置いて作り始める。《学校の裏山で, 5人の子が木



図-17 小人の家に遊びに来た子供たち

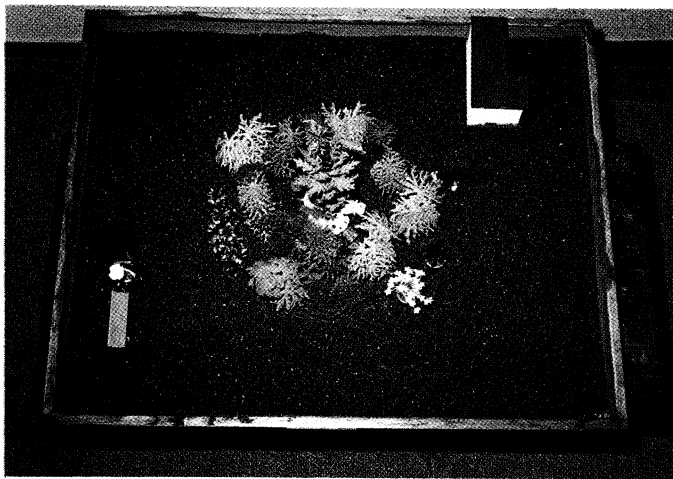
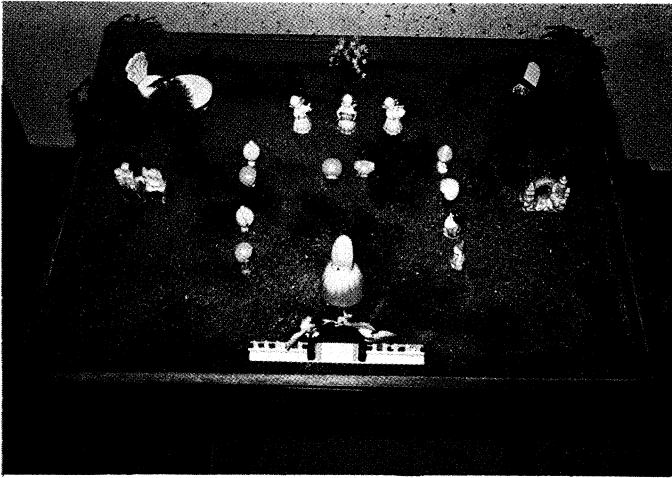
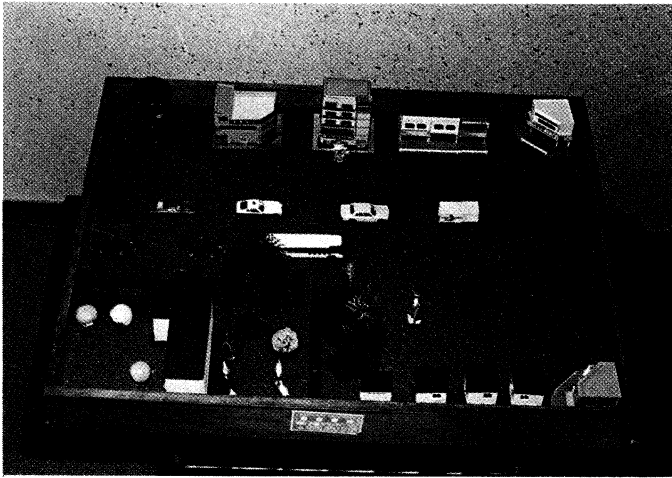


図-20 木の根元に横たわる5人の子供



図一21 王子様とお姫様の結婚



図一23 町

の根元に頭を寄せて横になり休んでいる。ベンチ(左下)には散歩に来た女の子が坐っている」との説明である。

箱庭の後、M子の方からきょうだい喧嘩のことを語る。弟の方が悪いのにすぐ泣く。そのため自分が母親に叱られることがある。私は年下の弟に負けるのが悔しいと言う。

<スクリブル>は、枠⊕で、M子が「あくびしている鼠」、私は「ベティさん」。枠⊖では、彼女は「子供の試験の成績が悪かったので怒っているお母さん」を投影する。外界志向的な表現では否定的母親像が示される。しかも、第3回、4回の「怒鳴っている女の人」、「人と喧嘩して大声で話している女の人」に比べると、今回のそれは子供を怒るお母さんというようにより直接的である。私が投影したのは漫画ジャングル大帝の主人公「レオ」であった。

母親の報告によると、M子の弟に対する攻撃と父母(特に母親)への反抗はさらに強まり、母親が弟ばかり依怙贖すると言って頻繁に抗議する。母親に対して絶対に譲らず、余所の人がいる前でも泣いて母親に向かって行ったりする。父母も弟もM子の行動の変化に大いに困惑した時期であった。

第3期 (第15回面接～第22回面接)

この時期には、第2期から進展して来た新たな統合へ向かう動きがピークに達し、M子の内面において母親との和解が生じ、超自我の緩和、改変が行われて、人格がより高次の統合性を持つものへと変容を遂げる。

〔第15回面接〕 (7月21日)

母親と来談。<箱庭>では、「王子様とお姫様の結婚」という作品を作る(図-21)。右側の城の王子様と左側の城のお姫様が結婚し、(神父の人影がなかった)ので修道尼が祝福している。2つの世界の統合のテーマを含むマンダラ表現である。

<スクリブル>では、M子は「焼餅焼いて大きい口開けて怒っている女の子」を表現する。まさに彼女が母親、弟との関係において抱いてきた怒りが直接表現された感じである。しかも、女の子の年齢はM子の現実の年齢のところへ戻っている。私は前回のファリクなイメージを受けて「草を食べている子

犀」を投影した(図-22)。

M子の変貌ぶりに父親が困惑していると母親から聞いていたので、第15回面接の3日後に父親と面接する。父親は「症状が失くなって喜んでいますが、弟と喧嘩する時にきかなくて……。それだけは先生に治してもらいたいと思って。M子には女の子らしく育ててほしい」と語る。治療者はM子の現在の状態の意味と今後の見通しについて説明し、父親も一応納得する。

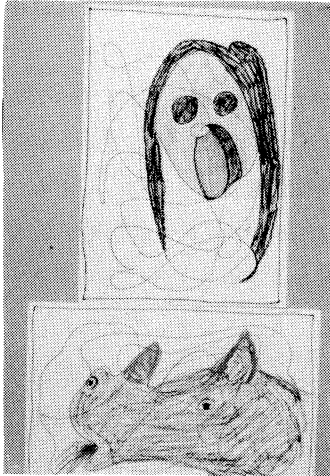


図-22 焼餅焼いて怒っている女の子 / 草を食べている子犀

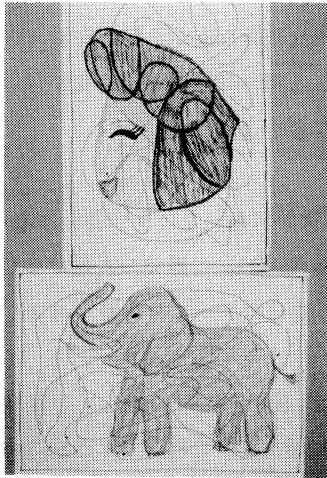


図-24 笑っているお母さん / 歩いている象

〔第16回面接〕 (7月28日)

母親、弟と3人で来談し、復路はM子独りで帰る。〈箱庭〉は「町」(図-23)。町並みで、ダンプカー、バスなど車はすべて右方向へ走っている。第14回に右上隅にあり、今回左下隅に反転した学校では、鶏、家鴨などを飼っている。現実的な状況となり、大きなエネルギーが無意識から意識の方向に動き出すが、この動きから区分されるかのように学校領域が柵で囲まれている。

〈スクリブル〉(枠⊕, 2回)では、1回目M子は「笑っているお母さん」を投影し、初めて肯定的母親像が示される。私は箱庭作品からの連想で「鼻を上げて歩いている象」(図-24)。しかし、2回目には、彼女が「ヒヨコ」で自己の柔弱な面をも表現する。私は「ハンバーガー」であった。

〔第17回面接〕 (8月4日)

母子3人で来談。2,3日前家族でP海岸へキャンプに行き楽しかったと語る。〈箱庭〉は「昔」。左上と右上に藁葺屋根の家があり、どちらも馬と鶏を飼っている。下辺に沿って人が馬に乗り往来している。前回の箱庭の学校領域にひき続いて養育のテーマも含まれている。

〈スクリブル〉で、M子は自分と同年の「優しい外人の少女」を投影する。優しい少女というあり方が自分から遠くなりつつあるということであろうか。私の方は「スペースシャトル」であった。

外的行動では、この頃から弟や父母に対する攻撃、反抗が大分和らいでくる。

〔第18回面接〕 (8月18日)

母親に用事が出来たため往路はM子独りで来る。日焼けして元気そうである。〈箱庭〉は「保健管理センター」。面接室が所在する保健管理センターの周りを第16回の箱庭で用いた柵で囲んでいる。センターの脇の道を2台の車が左方向に走っている。

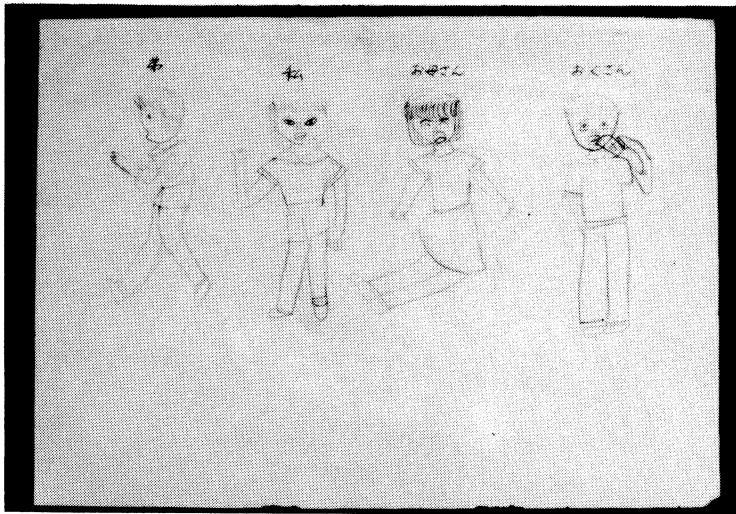


図-25 動的家族画(2)

この回〈動的家族画〉を指示すると、家族4人を同じ水準に並べ、弟、自

分、母親、父親の順で描く(図-25)。《弟は駆けっこして走っている。私は弟と喧嘩して弟を叩こうとしている。お母さんは坐わって笑っている。お父さんはビールを飲んでいる》と説明する。笑っている母親がM子の近くに描かれたのが印象的である。M子は目を光らせて弟にこぶしを上げており、弟はそれから逃げるかのように走っている。

この頃、母親は夫も単身生活では可哀想であると感じ始め、やはり家族が揃って生活すべきではないかと考えている。母親がそのことを子供たちに話すと、M子は「転校したくない気持もあるけど、お父さんが可哀想だから行こう」と言う。彼女は「もしも学校変わったら人間変わってみよう。今までは人からいじめられたけど、今度は人をいじめるような子になってみたい。でも……私には出来ないな」とも語ったという。

〔第19回面接〕 (8月25日)

M子独りで来談。「今日は独りで来たかった。お母さんがついてくるのが嫌ではないが、自分で来たかった」と語る。

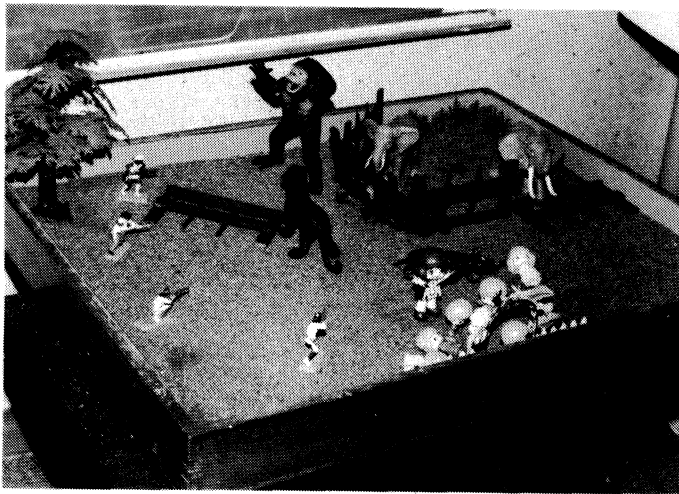


図-26 柵が毀れて逃げだした動物たち

<箱庭>は「柵が毀れて逃げ出した動物たち」(図-26)。M子の説明による

と、《管理人がいない小さい動物園で、古いので柵が緩んでいたが、男の子が悪戯して柵を倒した。そこへ象も寄って来て柵を倒した。動物(ゴリラ, 黒豹, 犀など)が逃げ出して、幼稚園の先生と子供が逃げようとしている。この女の子は犀に突かれて倒れたが、死んではない。犀は鉄砲で撃たれて死んだ》とのことである。第16回, 18回の箱庭作品で用いられた柵と同じものが使われるが, 今回は柵が打ち毀されるのが中心テーマである。

＜スクリブル＞では, 彼女が「体操している小学6年の女の子」を表現し, 私は「岩の上にとまっている鷹」であった(図-27)。

〔第20回面接〕 (9月1日)

母子3人で来談。＜箱庭＞は「家の中。4つの部屋」。左下が女の子の部屋で, 左上に男の子の部屋があり, 後者の方が少し大きいとのことである。右上に茶の間, 右下は台所。



図-28 昔と今

天国で, 動物などの人形の中に人が入ってお祭りのパレードをしている。左は

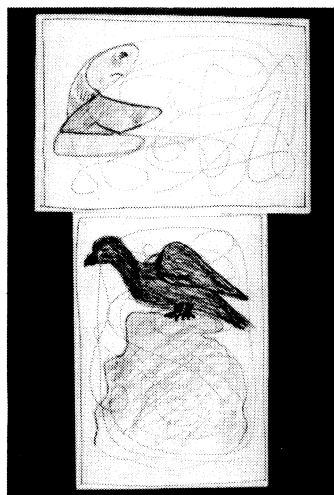


図-27 体操している少女/
岩にとまる鷹

〔第21回面接〕 (9月8日)

母親と2人で来談(以後最終回まで同じ)。＜箱庭＞は「昔と今」(図-28)。右辺から $\frac{2}{3}$ の領域が「今」, 左辺側 $\frac{1}{3}$ が「昔」で, その2つが柵などで区分されることなく1つの枠の中に納められ統合された感じである。彼女の説明によると, 《右の町は, 今歩行者

昔で、働いてのんびりしている」とのことである。

この後、〈粘土〉を試みる。M子は、「天然記念物の植物」を作り、《これが種で、ここは芽が出て、これは白い花が咲いた》と3つの段階の説明をする。彼女の内面で何かとても大切なものが芽ばえ花開いてきたようである。私は「ボートを漕ぐ少年」を作る。

面接の終りに迎えに来た母親が入室すると、M子は母親が坐ったすぐ側に移動し、身体を寄せるようにして坐わる。嬉しそうな顔をしている。そういうM子に母親がにこにこ笑顔を向けているのが印象的であった。

〔第22回面接〕（9月15日）

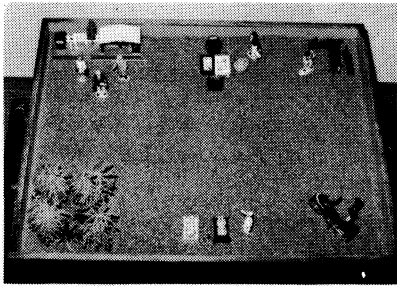


図-29 6つの場面

〈箱庭〉は、右上隅から始め、右下隅、左上隅、左下隅、下辺中央、上辺中央の6領域に、その順で「6つの場面」を作る(図-29)。それらは、《①牧場。馬を飼い、男がスコップで作業している。②男がバイクに乗ろうとしている。③人が駅から下りてくる。

④男が森を探検している。森の中にはサソリや蜘蛛がいる。⑤病院で赤ん坊が生まれた。側に看護婦がいる。⑥レストランでウェ이터がいる》である。これまでの治療過程での体験をおさらいした作品のようにも思われる。

〈スクリブル〉では、枠⊕でM子が「膨らんで人の顔みたいになった餅」、私は「侍大将」であった(図-30)。枠⊖では、彼女は「きれいな変わった鳥」を表現する。赤、黄、緑、青色で美しく彩色されたその鳥は、まだ子供だが人間の言葉を話せる悪戯者だという。私は「昼寝している河馬のお父さん」であった(図-31)。

数日後の母親面接で、私は母親の顔が柔和になったという印象を受ける。先日M子がテレビドラマを見ていて「優しいお母さんだ。こんなお母さんだと良い」と言ったので、母親が冗談めかして「ママは怖い？優しい？」と尋ねてみ

た。M子は「すごく優しい時もあるけど、怖かった」と答え、「今もやっぱり何かか遠慮する」とも言ったという。また、M子は母親が熱を出した時水枕を作って看病し、涙を流しながら「お母さん頼りにしているのだから」と言ったとも語る。

また、このところM子は非常に楽しがって学校に行っており、母親は彼女がどうしてこんなに学校が好きになったのかとさえ思うという。

第4期 (第23回面接～第29回面接)

終結までの時期である。この時期M子は家族の中で新しい関係を得て安定し、学校生活においても積極的となる。また、内面的には終結に向けての準備をも示しながら終結を迎える。

〔第23回面接〕 (9月22日)

今回は箱庭には向かわず、その日にあった体育祭のことなどについて語る。その後、<スクリブル>をする。枠⊕で、M子は「笑っている男の絵描き」を投影し、私は「白い若駒」であった。枠⊖では、M子が「草の葉から雫が水溜りへ落ちるのを面白がって見ている男の子」、私は「はねている子羊」を表現した。

〔第24回面接〕 (9月29日)

<箱庭>は「お菓子を食べた後遊んでいる姉、弟、妹の3人きょうだい」(図-32)。姉(7歳)は右上のトンネルから出て来て走り去って行く汽車を見てい

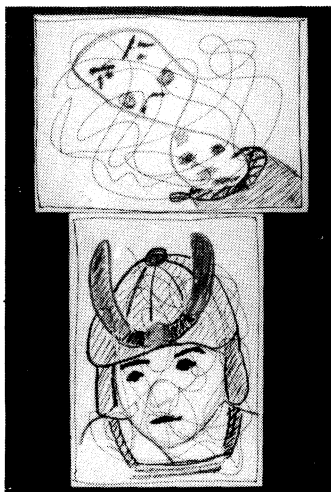


図-30 膨らんだ餅 / 侍大将

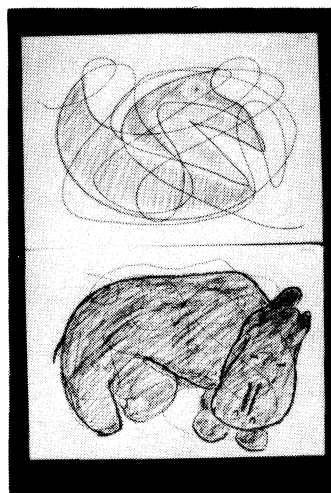


図-31 きれいな変わった鳥 / 昼寝している河馬のお父さん

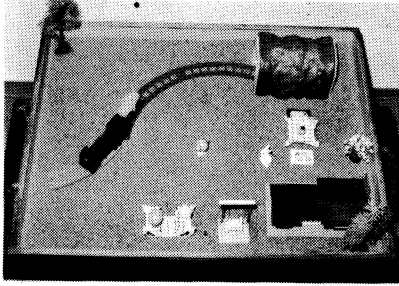


図-32 遊んでいる3人のきょうだい

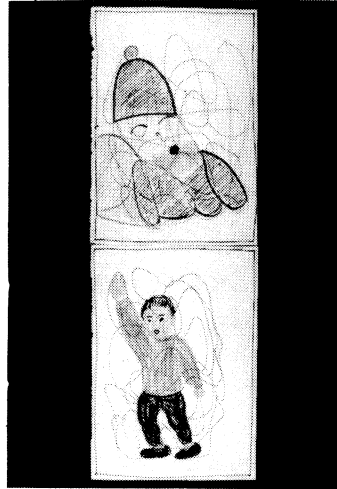


図-33 サンタクロース/男の子

る。人物の年齢が再びM子の現実の年齢よりも下がっている点が注目された。

<スクリブル>は、枠⊕でM子が「サンタクロース」で、私が「オーイ、と手を振ってやってくる男の子」であった(図-33)。枠⊖では、彼女が「飴をなめている蟻の男の子」、私が「水面に浮かんでのんびりしているネッシー」であった。

面接の終りに、私は面接の間隔をあけることを話題にし、彼女の考えを聞く。M子は「どっちでもいい」と言うが、今ひとつはっきりしない感じなので、次回にどうするか決めることにする。

母親の報告では、この頃M子は弟に嫉妬しなくなり、きょうだい喧嘩も少なくなって落ち着いてきたという。

【第25回面接】 (10月6日)

<箱庭>は「牛を飼う家の女の子」。5歳位の女の子が本を読みながら搾りたての牛乳を飲んでいる。側にその子の祖母(母方)がいる。この作品でも、女の子の年齢が低く、食物摂取のテーマが示されている。

〈動的家族画〉を描き、《私は学校で鬼ごっこして友達つかまえている。お父さんは一緒に遊んでくれていて笑っている。弟は寝ている。お母さんは食器洗ってしまうところ》と説明する(図-34B)。現実行動と対応して、家族画の中のM子は学校で友達と元気に遊んでいる。弟が寝ているのは、もはや弟の存在が気にならなくなっているということであろうか。

〈スクリブル〉(枠⊕)では、M子が「女の子の蒲団の上に置かれた熊のぬいぐるみ」を投影し、私は「ポパイ」であった。

この回にM子の了承を得たので、次回から2週に1回のペースで面接することにする。

〔第26回面接〕 (10月20日)

学校で遊んでいるうちに面接に来る日だということを忘れていたということ15分ほど遅刻。2週間間隔があいたが調子は変わらないと語る。〈スクリブル〉では、M子が「餌に逃げられてしょんぼりしている蛇の子」を投影する。私は「お祭りで花で飾った牛」であった(図-35)。

久しぶりに試みた〈自由画〉では、自分が飼っている文鳥の四態《水浴びしている：立っている：坐っている：手に乗っている》を描く(図-34A)。この自由画は、治療の初期のものに比べると彼女のあり方がはるかに自由度を増していることを示唆している。

母親の話では、M子は以前とは別人のように生き生きとして学校へ行っているという。夕方まで学校におり友達と騒ぎながら帰ってくる。不良ばい言葉を使ったりして気になる面もあるが、それでいいのかなとも思う。今までになかったことなので母親としては嬉しいと語る。M子は「お父さんが転動したら、今度こそ皆で一緒に住もう。私はどこの学校でもきかなくやっっていける」と言

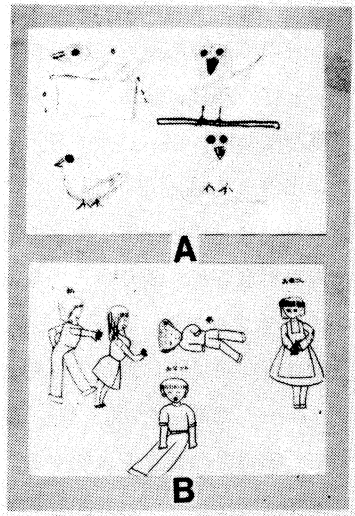


図-34 文鳥の四態／動的家族画(3)

っているという。また、最近M子は体つきが変わり胸も膨らんできて、考え方も大人ぽくなってきたという。父親は、M子が昔のように自分にべたべたしなくなったので、寂しがっている由。母親は「今度のM子のことで大きい勉強をした」と感慨深げに語る。

〔第27回面接〕 (11月6日)

ドンドンと力強くドアをノックして入室し、元気そうである。〈箱庭〉は「町のお祭り」(図-36)。教会の庭の真中に町の人がお金を出し合って沢山の食べ物を用意され、周りに人が集っている。

〈スクリブル〉で、M子は「空を飛ぶ鷹」を地上から見上げた姿で表現する。私は彼女が見事に飛び立ったと思い感動した。私が投影したのはコリー犬「ラッシー」であった(図-37)。終結のことを話題にすると、彼女は「あと2日来て」と自分の意志を表明する。

〔第28回面接〕 (11月20日)

この回〈動的家族画〉に誘うと、自分、母、弟、父の順で描く(図-38)。《家族でトランプしている。弟に変な札が出たので、他の皆が笑っている》との説明である。言わば家族マンダラのようなその絵は、彼女が家族の中で安定した位置を獲得し家族の関係も変化したことを端的に示している。

面接の終りに、M子は治療者に手紙とプレゼントをくれる。手紙には、治療者との交流で嬉しかった経験がいくつか記されており、《なんだか、ここに来てからうれしいことばかりでした。こんなにうれしかったことはありませんでした。でも、あと1日で終わってしまうのは、今までで一番かなしいです》と謝意と別れの悲しみが述べられていた。手紙の中では、なぜか治療者の名前から水の水の字がすべて落ちていて「清先生」になっていた。可愛いリボンがついた箱の中には大き目の〈ティーカップ〉が1個入っていた。

〔第29回面接〕 (12月8日)

最終回。髪を短くカットしている。真新しいセーターの胸には、髪に赤いリボンをつけ目を伏せた少女が大きく描かれている。私には、その少女がお澄ましをしているようにも寂しそうであるようにも見えた。退室時、M子は二度、

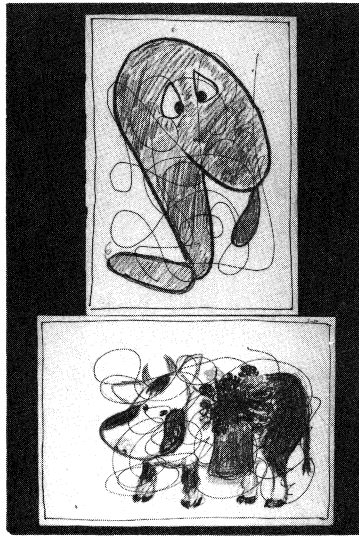


図-35 餌に逃げられてしょんぼりしている蛇の子 / お祭りで花で飾った牛

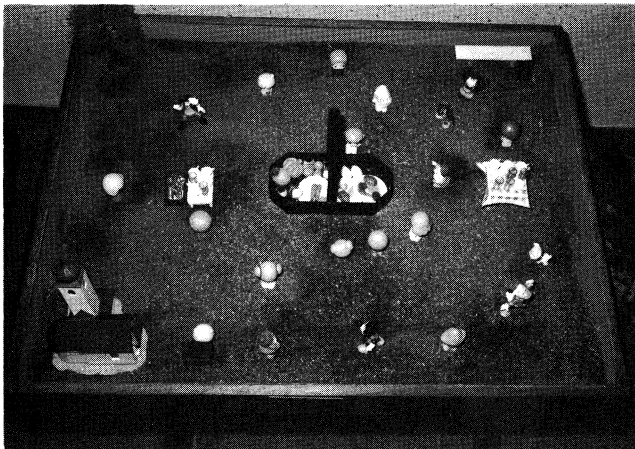


図-36 町のお祭り

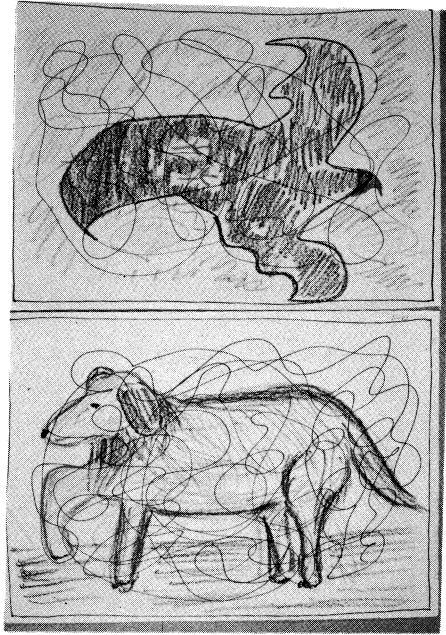


図-37 空を飛ぶ鷹 / ラッシー

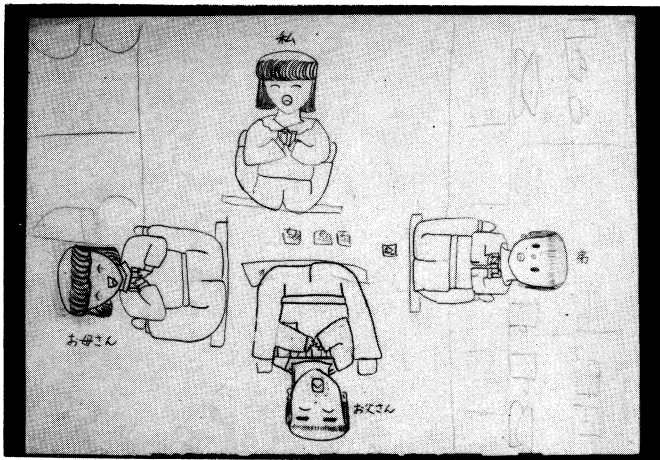


図-38 動的家族画(4)

三度と礼を言って去って行った。

その後母親から連絡があり、翌年春から家族全員が一緒に生活することになった旨報告があった。

IV 考 察

1. 家族力動と症状の意味

本事例では、家族関係を検討する資料として、父母から聴取した家族歴、生活歴のほかにクライアントが描いた動的家族画(Burnsら 1971)²⁾の情報を利用出来る。動的家族画は、クライアントが知覚している家族の人間関係、各成員の特徴、本人の家族への態度などを知る手がかりを与えてくれるものである。

以下では、家族画の分析を中心にして症状形成の背後にある家族力動と症状の意味について考察する。

第5回面接でM子が描いた動的家族画は多くのことを象徴的に物語っている。絵を見てまず感じられるのは、家族成員それぞれが困惑や緊張感を漂わせていることである。その中で、父親が会社で名前を呼ばれて緊張して立っている姿は、職場の上司の不正行為発覚に端を発して父親を襲った苦境を反映しているのであろう。

絵の中の家族成員の相対的な高さ(位置)に着目すると、母親と弟が上位に描かれ、父親とM子はそれよりも下位にある。これはそのまま家庭内での順位(pecking order)を示していると考えられる。また、母親と弟には瞳があるが、M子と父親には瞳が欠如している。しかも、母親の瞳は黒々と描かれている。家庭内での父親の位置は低く、まさに母親が「目を光らせている」印象であり、母親主導的な家庭状況が窺える。なお、父親とM子のところには彼らを押えつけるものであるかのように机が描かれているが、これは両者共に超自我による規制枠の強いことを示唆している。父親に同一化して育ったM子は父親の超自我の強さ——左遷事件からもその一端が窺えよう——を受けついでいるのであろう。

また、家族画におけるM子と母親の距離は一番遠く、母親との間で心理的な距離があることも示されている。母親はM子の嫉に厳しく弟だけを可愛がる傾向が強く、M子はそれへの不満を持っていた。2年生になる時に父親の転勤があり、彼女はそれまでべっりの関係にあった父親と離れて母、弟と3人で過ごすことが多くなった。M子の愛情欲求はますます充足されなくなり、不満は一層強まっていったと思われる。彼女はそうした不満、怒りのいくらかを弟に当たるとい形で出していたが、それらを母親に向かって直接表現することは出来なかった。彼女はそれまで親に一度も反抗したことのない子であった。心の中で母親に対して怒りや攻撃的感情を経験したり、あるいは甘えたい願望を抱いていたりしても、厳しい超自我にもとづく内的禁止と怖い母親(彼女の怖い母親像は、伯母と激しく口論する母を目撃することによって一層強化されたのかもしれない)から叱責、拒否されるのではないかという現実不安のために、それらを表わせなかったのであろう。こうした解釈を支持する指標を家族画においても見出すことが出来る。切断されるような形で描かれた母親の腕からは母親に対する攻撃性を読み取れる。母親が持つ買物籠にみられる“X”は、Burnsら(1972)²⁾の解釈仮説によれば衝動コントロールをめぐる葛藤を示すサインである。また、M子の左口元に走る線は表現することへの禁止を連想させる。

以上のことから、M子の息を強く吸い込む症状は、母親に向かおうとする攻撃性、甘え願望と超自我との間の葛藤に対する自我による妥協、防衛として形成されてきたものと考えられる。すなわち、この症状は一方では母親に向かう攻撃性を呑み込み防衛しようとするものであり、同時に退行的な様式で甘え願望を満たそうとするものであったと思われる。

また、M子はそれまで親に逆らったことのない子であり、真の自我の発達に必要な「反抗」のステップを乗り越えていなかった。階段や坂を上る際に喘いでスムーズに上れない症状は、彼女が成長の次のステップを上り切れないでいることを身体言語で象徴的に表現しているものと考えられる。

2. 治療過程の検討

1) イメージの変遷過程

本事例の心理治療は非言語的技法によるイメージ表現を主体にして行われている。ここでは、治療過程における箱庭や描画などのイメージの変遷について考察する。

初回面接における自由画は、M子の内向的で消極的なあり方を示しているが、同時に《こちらに向かってバットを構えるバイキン君》は治療者に対する応答姿勢を感じさせるものでもあった。箱庭作品においても、彼女の引込み思案なあり方、沈滞した内的世界が窺われる。内的な動きを荷うものはほとんど登場しておらず、わずかにブランコ、シーソーによって微細な内的な揺れが暗示されているだけである。また、自己像を示すとも考えられる家は左下隅、すなわち外界から最も遠い領域に置かれている。

第3回の自由画も初回のそれと類似の傾向を示しているが、治療者がスクリブルで“あなたの受け皿になってあげよう”との気持をこめて《ティーカップ》を投影すると、彼女はまるでそれを感じたかのように否定的母親像を思わせるイメージ表現を繰り返し、第5回には動的家族画によって自己の葛藤・問題を開示する。この間、箱庭表現では、4回から動物が登場するようになり彼女の内界は少しずつ生気を帯びてくる。また、初回到左下隅にあった家が移動し始め、4回の下辺中央を経て、5、6回には最も現実的な領域である右上隅に位置する。外界とのかかわりが少しずつ変化していることが窺える。前述のように、M子の家族画は極めて象徴的に多くのことを語っていたが、これは彼女が外界に対して徐々に自己表現的になり始めているところでタイミング良く実施されたためもあると思われる。第6回のスクリブルには《5歳位の女兒》が登場し退行の兆しが窺える。現実行動でも、M子は母親に対して甘えたい素振りを見せるようになってくる。

第7回の箱庭では「反転」現象が生じている。「領域の反転」は統合への動きを示すテーマとして箱庭解釈上重視されるものである。⁴⁾また、右上隅にアーチ型の門が置かれ、外界との交流の通路が開いた感じである。自由画にも《目覚めたばかりの雌兎》が登場する。しかも、それは色彩を用いて描かれて

おり、感情的要素が加わったものになっている。続く8回の箱庭作品では町並みとなりより広い世界に開かれる。これと軌を一にして、自由画でも初めて用紙の中央に人物像が描かれる。この辺りの外的行動では、通学仲間N子の要求に背いて他の級友と帰ってしまい、その後のN子とのめごとにも自己主張的に対処している。また、階段を普通に上れるようになっている。

第9回の箱庭作品には、馬、牛の飼育という母性性のテーマが出現している。養育のテーマは内的エネルギーの蓄積、強化を示唆するものである。スクリブルで登場した《元気者の小人》は、彼女の無意識の深みから出現してきた新しい動き、発達していない心理機能を、おそらくは肯定的創造的アニムス(女性の中の男性的側面)を象徴するものであると思われる。ユング心理学的立場からのおとぎ話研究によれば、例えば「白雪姫」、「森の中の3人の小人」などの話で女性の主人公を助ける小人は肯定的アニムスを象徴するものと解される¹⁾。肯定的なアニムスは行動力、主導性、創造的な精神の力などの特性を表わすが、M子の元気者の小人もそうした特性を荷うものであり、心の内奥でアクティブな動きが生じてきていることを示唆しているものと思われる。(小人のイメージは第13回の箱庭作品につながっていくが、それだけでなく第19回の箱庭において柵の打ち毀しのきっかけをつくるトリックスター的な男の子、それ以後の回のスクリブルに登場する男性像や鳥のイメージとも関連があると思われる)。このように、内面志向的なイメージ表現では深層で新たな動きが生じていることが窺われるが、他方より外界志向的な表現になると甘え欲求が示されている。これらは、この時点でのM子の心的状況を的確に表わしていると言えよう。この頃、外的行動では、彼女はマラソンを始め症状が消失している。

そして、10回目、箱庭で汽車が左上隅のトンネルに入るテーマが示され、それ以後に治療的退行が進展し心の深みでの探求が始まることが予示される。果して第11回には、彼女の内面で《工事》が始まる。12回の《5歳の女の子の部屋》、《目玉焼きと人参》を経て、13回にはさらに退行が深まる。箱庭の《小人の家》は、異次元の世界、つまり無意識のより深い層を表わすものであろう。心の深みに降下し、そこに住む小人と交わっている。また、そこには発展

の可能性を示すものとしての赤ん坊が寝ている。そして、第14回目、ファリックなイメージを荷うポプラの木の根元に頭をつけて休む5人の子供は、Kalf (1966)³⁾の言う「中心化(Zentrierung)」を表わしているのであろう。まさに、「心の中心なるもの」に心的エネルギーが集中する印象である。スクリブルでは以前よりも直接的な形で否定的な母親イメージが表現される。これらのイメージ表現と呼応して、この辺りの現実行動では父母への反抗、攻撃がクライマックスに達する。彼女は、これまで出来なかった反抗の体験を持ち確実に成長のステップを一段上り得たのである。

第15回目、箱庭で《王子様とお姫様の結婚》のテーマが示され、スクリブルでは《焼餅焼いて怒っている女の子》によって母親、弟との関係で経験してきた怒りが治療の場でも直接表現される。この箱庭作品は、二つの世界の統合のテーマを含むマンダラ表現であり、「心の全体性」を象徴するものである。M子の心の内部で自我と無意識のより高次の統合へ向かう働きが生じていることが感じられる。ここで、結婚を祝福するものとして修道尼が登場しているが、これは面接室に神父の人形がなかったという現実的理由によるだけでなく、彼女が新たな統合性を得るには母性的なものを特に必要としていることも関係していると思われる。また、修道尼で表わされているものには治療者から取り入れた部分も含まれている可能性がある。

第16回の箱庭では、現実に適応する方向で大きなエネルギーが流れ出す。自我が強化され新しい動きが生じてくるが、まだ未解決な部分もあることが区分された学校領域に示されている。スクリブルにおいても、肯定的な母親像の回復、内的な母親との和解が示唆されるが、他面《ヒヨコ》によって自己の柔弱な部分、十分育っていない部分があることが表現され、上述の箱庭表現における二相との対応をみせている。そして、この未解決部分は、第17回の箱庭の《昔》、すなわち古い自分へと発展し、ここから2つの目の展開過程が始まる。つぎの18回の箱庭では、車が左方向に走っており、心的エネルギーが再び退行していることが窺える。もう一段高く跳躍するための退行である。柵で囲まれた保健管理センターは、彼女を保護する治療空間、もしくは治療者との関

係を象徴するものと思われる。なお、この回に試みられた動的家族画でも、母親が肯定的なイメージで描かれ、しかもM子の側に位置づけられている。

そして、第19回目の箱庭では、トリックスターの男の子と象によって柵が打ち毀される。これまで自分を規制してきた硬い柵を自分の手で打ち毀したのであろう。新しい自我を形成するには古い自我を一旦毀さなければならないが、それは攻撃性によってなされるものである。第16回で鶏、家鴨の飼育(学校領域)、17回には馬、鶏の飼育というように養育のテーマが続きエネルギーの強化が暗示されていたが、ここにおいてパワーアップし象、犀、黒豹、ゴリラという野性的で力強いものが登場し柵が毀される。また、犀と象は、第15、16回に治療者が表現したイメージでもあり、彼女が治療者から取り入れ自分のものとして血肉化した部分を表わしているとも考えられる。とすると、犀の死は、治療者を乗り越えるテーマを象徴的に示しているとみることが出来よう。続く第20回の《男の子の部屋、女の子の部屋》は、弟との関係を踏まえて家庭における自分の空間を確保したことを表現しているものと思われるが、同時にまた治療者との関係においても自分の領域を主張したと解することも可能かもしれない。

第21回の箱庭では、自分の《昔と今》、つまり古い自分と新しい自分が統合され、より高次の統合性を持つ人格に変化したことが示される。この回の《天然記念物の植物》、22回の《きれいな変わった鳥》は、M子の変容を成し遂げたことの象徴的表現であると思われる。ここに、彼女の心の変容過程は一段落し、《6つの場面》という形でそれまでの体験のおさらいがなされる。現実水準での母親との和解を思わせるやりとりが母親から報告されたのもこの頃であった。

第24回～26回のイメージ表現では、再び人物の年齢がM子の現実の年齢よりも下がり、食物摂取のテーマが出現している。これには、暖かく保護されたところから離れて現実の厳しさを受け容れていく過程、終結が遠くないことを予感しての悲しみの表現、別れの準備といったことが関係しているのではなかろうか。第24回の箱庭の《トンネルから出て来て走り去って行く汽車を見ている

女の子のイメージは特にそうしたことを連想させる。(汽車がトンネルから出て来るのは、第10回の箱庭の汽車がトンネルに入るイメージと対応するものでもある)。この時期M子は学校生活において積極的となるが、すべてがOKということではなく、クラスの特定期間ととの問題にもぶつかっていた。また、治療者の中では、そろそろ終結のことを考え始めていたが、彼女も終結を予感していたのかもしれない。終結のことも含めた現実の厳しさや否定的な側面を、もう一度年令を下がってそれらも現実の一部として取り入れていくというテーマがそれらのイメージ表現の中に示されているように思われる。

他方、第25回の動的家族画と26回の自由画《文鳥の四態》は、次元は異なっているが、それぞれ彼女が以前よりも自由なあり方を獲得したことを表現しているようである。家族画は、弟とのことが気にならなくなり仲間との関係の方にエネルギーが向いていることを示唆している。

第27回の箱庭では、教会の庭の真中に御馳走が置かれ《祝祭》となる。やはり食物のテーマであるが、今回のそれは町の人のお金を出し合って用意したものであり、社会的連帯、共同性の中から得るエネルギーを意味するようである。そこには、彼女が前思春期の心の発達にとって大切な仲間との親密な関係を獲得しつつあることが反映されているのであろう。そして、この回、M子は鷹の姿を借りて自らの力で飛び立ったことを表現する。彼女は乗り越えるべき成長のステップを見事に越え飛び立つことが出来たのだ。同時にまた、最後の家族画が示すように、家族における好ましい関係と暖かさをも獲得することが出来たのである。

2) 治療関係

初回面接におけるM子は、自ら語ることなく治療者と視線を合わせることもない引込み思案な態度を強く示していた。治療者は、そうしたM子のあり方を尊重して、彼女の動きを阻害しないように受容的な態度で見守りながらかわっていきこうとした。具体的には非言語的手段を主体とする接近法をとった。殊に、相互スクリブルや相互粘土造形などの方法を用いることにより治療者自身もイメージ表現をして、彼女と非言語的な次元においてもコミュニケーション

をはかるように努めた。これらの相互法は、山中(1979)⁹⁾が述べているように、クライアントと治療者との間の不平等性を少なくし、クライアントの不安、防衛を緩和する上ですぐれた力を発揮する。また、この方法は、治療過程のそれぞれの時点で治療者がクライアントに対して意識的無意識的にどのようにかかわっていたのかを見返す際に有用な情報を与えてくれるものでもある。

治療過程の初期には、治療者は上述のようなM子の心の状態に波長を合わせて交流していくことを特に心がけた。そうした姿勢は、第4回頃までの粘土造形やスクリブルにおいて治療者が<白兔>、<鶯>、<白鳥>などのおとなしい動物や(彼女の志向性の強い^(註1))鳥のイメージを表現していることから窺えよう。また、第3回の<ティーカップ>の投影は、彼女のどのような表現でも受けてあげようとの気持にもとづくものであった。このような治療者のかかわり方が、徐々にM子の内的イメージの動きを賦活し自己表現を促すように作用したと思われる。既述のように、<ティーカップ>の表現を契機にして彼女のイメージ表現が深化し始める。

第4回頃からの数回における治療者のイメージ表現には、<寝呆け犬>、<パンダ>、<ミッキーマウス>、<キャンディ>など子供に馴染の深いものやおどけたイメージがよく登場している。この辺りでは、治療者も自己のうちの「子供の心」を働かせてかかわっていたように思われる。おそらく、彼女からすると、自分が望んでいるものが治療者から次々と出されてくることに喜びと不思議な感じを抱き、また自分の表現を共感的に受けとめてもらえるという感じを経験していたのではなかろうか。M子の心が少しずつ外に向かって自発的主体的な動きを示すようになる。他面、治療者とのそのような交流は治療的退行を促すようにも作用したと考えられる。

治療的退行が進展しM子の行動の変化が起ころ始めると、治療者のあり方も少し変化している。それまでと同様に彼女の内的過程に目を向けながら、他方では外的状況に心を配って父母の受けとめ方などの調整をはかりつつ、M子の歩みを見ていこうとしている。こうした治療者のあり方の変化は、第9回からスクリブルを枠あり、枠なしの2枚法で行っていることにも反映している。ま

た、M子に対する態度に父親的なものも加わっている。例えば、N子とのもめごとに関しても、M子自身の気持や考えを把握した上で、彼女の自主的な動きに委せ客観的に見守る役割をとっている。

さらに、この頃から、治療者とM子が相呼応するようなイメージを交わすようになっており、イメージレベルでの相互の共感、受けとめが深まった観がある。

第15回辺りから、M子がそれ以前に治療者によって示されたイメージと類似の、あるいは関連性の強いイメージを表現するということがしばしば生じている。〈第11回の修道尼→第15回の箱庭の修道尼〉、〈第13回の体操する男子中学生→第19回の体操する女の子〉、〈第15回の子犀、16回象→第19回の箱庭の犀、象〉、〈第19回の岩にとまる鷹→第27回の空飛ぶ鷹〉などであるが、それらは治療者への「同一化」、「取り入れ」機制が働いていることを示唆するものである。このような現象が顕著に生じたのは、彼女が息を強く吸い込むという形で愛情を強く欲求していたためであると思われる。彼女は、治療関係の中で、特にスクリブルなどを介して、治療者との自由なやりとりを経験することが出来た。その中で彼女は治療者のものを時々取り入れて自分のものに血肉化していったものと考えられる。この自由なやりとりこそ、これまで家庭の中で得られなかったものであり、彼女が強く欲していたものである。おそらく治療者との交流において、彼女は生まれて初めて自分の話を聴いてもらい受けとめられたという感じを持ったのであろう。治療者への手紙の《なんだか、ここに来てからうれしいことばかりでした。こんなにうれしかったことはありませんでした……》という言葉は、その辺りの経験にふれているように思われる。

しかし、M子は治療者から与えられるものをただ取り入れるだけにとどまらず、第19回には「犀の射殺」という形をとって(治療者が父親的であると同時に母親像をも体現していたとすれば、象徴的な父親殺し、母親殺しを行って)、治療者を乗り越え、一層自我の自立性を高め変容を遂げていく。

そして、第28回、M子は治療者にコーヒー茶碗を1個贈る。〈ティーカップ〉は、治療者が最初のスクリブルで彼女への気持を表現するものとして投影し

たものである。そのプレゼントは、「先生、私の気持をみな受けてくれてありがとう。本当に良い受け皿をありがとう。今度は先生がこれで飲んで下さい^(註2)」との気持をこめた受け皿のお返しであるようにも思われ、治療者は強い感動をおぼえた。

(昭和60年5月21日 受理)

(註)

- 1) 本文では記載を省略したが、初回面接時に<転生願望法>を施行している。それによると、なりたい動物は小鳥で、その理由は「空を飛べるから」であり、なりたくないものは蛇で「怖いから」という理由であった。
- 2) この贈り物の意味についての解釈は京都大学教育学部山中康裕助教授のご指摘に負っている。第28回面接を終えた時点で、山中助教授に本事例に関してのスーパービジョンをお願いし、上記の解釈をはじめとして多くの貴重なご示唆、ご指導をいただいた。そのことを記すと共に山中助教授に心からお礼を申し上げます。

参考文献

- 1) Birkhäuser-Oeri, S.: Die Mutter im Märchen. (Verlag Adolf Bonz, Stuttgart. 1976)
(氏原寛訳: おとぎ話における母 人文書院 東京 1985)
- 2) Burns, R. C. & Kaufman, S. H.: Actions, styles and symbols in kinetic family drawings: An interpretive manual. (New York: Brunner/Mazel, 1972) (加藤孝正他訳: 子どもの家族画診断 黎明書房 東京 1975)
- 3) Kalf, D. M.: Sandspiel.(Zürich: Rasher Verlag. 1966) (河合隼雄監修 大原貢・山中康裕共訳: カルフ箱庭療法 誠信書房 東京 1972)
- 4) 河合隼雄編: 箱庭療法入門 誠信書房 東京 (1969)
- 5) 中井久夫: 枠づけ法覚え書 芸術療法 5, 15-19, (1974)
- 6) 中里 均: 交互色彩分割法——その手技から精神医療における位置づけまで—— 芸術療法 9, 17-23, (1978)
- 7) 清水信介: 登校拒否女子中学生の心理療法における描画イメージの変遷 (第62回北海道精神神経学会(1982年12月)で発表) 精神経誌 86, 84, (1984)
- 8) 清水信介: 対人恐怖の一心理療法例——治療過程における心像の変遷 (第64回北海道精神神経学会(1983年12月)で発表) 精神経誌 86, 1020, (1984)
- 9) 山中康裕: 児童精神療法としての心像分析について 徳田良仁編「芸術療法講座 1」 星和書店 東京 (1979)
- 10) Yamanaka, Y: Multi-dimensional expression therapy and its application on a case of anorexia nervosa. 9th International Congress of the Psychopathology of Expression. Verona, Italy, 6. Oct. (1979)